

論壇時評

コロナ禍と国家 安心と自由 板挟みの中で

ジャーナリスト 津田 大介



つだ・だいすけ 1973年生まれ。今年度まで早稲田大学教授。著書に『情報戦争を生き抜く』『情報の呼吸法』『動員の革命』など。＝仙波理撮影

世界保健機関（WHO）が世界的流行「パンデミック」を宣言し、感染拡大が止まらない新型コロナウイルス。各国政府は、人同士の接触をできるだけ減らす「社会距離戦略」で感染の機会減少を図っているが、いまだ先行きは不透明だ。40年前にWHOの天然痘撲滅プログラムで中心的役割を果たした世界的疫学者ラリー・プリアントは2006年の講演で、もし今後パンデミックが起これば世界中で10億人が罹患、1億6500万人が死亡し、1兆3兆の経済損失が発生すると述べた①。最新のインタビュ②では、新型コロナウイルスが現在進行中の世界的危機であることを認め、現状を把握するために「確率論に基づいた無作

為抽出の検査をすべき」としている。諸外国より感染を抑え込めているように見える日本でも、政府の専門家会議メンバーの危機感強い。西浦博は保健医療従事者向けサイトで日本の感染状況をミサイルになぞらえ、「1月から2月上旬は短距離ミサイルが5〜10発命中した程度」だったが、3月は「空から次々と焼夷弾が降ってきているような状態」で、「火事を一つ一つ止めないといけない」と日本もパンデミック寸前である認識を示し、自粛ムードが解け、緩みつつある空気に警鐘を鳴らした③。著名な感染症対策専門家である岩田健太郎も「感染しても8割くらいの人自然治癒する風邪のようなウイルスなので、日常

生活を送りながら感染が広まってしまふ」と、新型コロナウイルスの軽微性が対処を困難にしている状況を指摘する④。新型コロナウイルスへの対処が難しい最大の要因は、現時点で有効な治療法が確立していないことだ。それまでは徹底的な検査と隔離で感染爆発を防ぐ「封じ込め」か、重症者中心に医療リソースを割り当てて適度に感染を遅らせることで大部分の国民の免疫獲得を目指す「集団免疫」か、各国とも両者の間で複雑な調整をせざるを得ない。どちらの戦略を取るにしても社会距離戦略が重要になる⑤が、

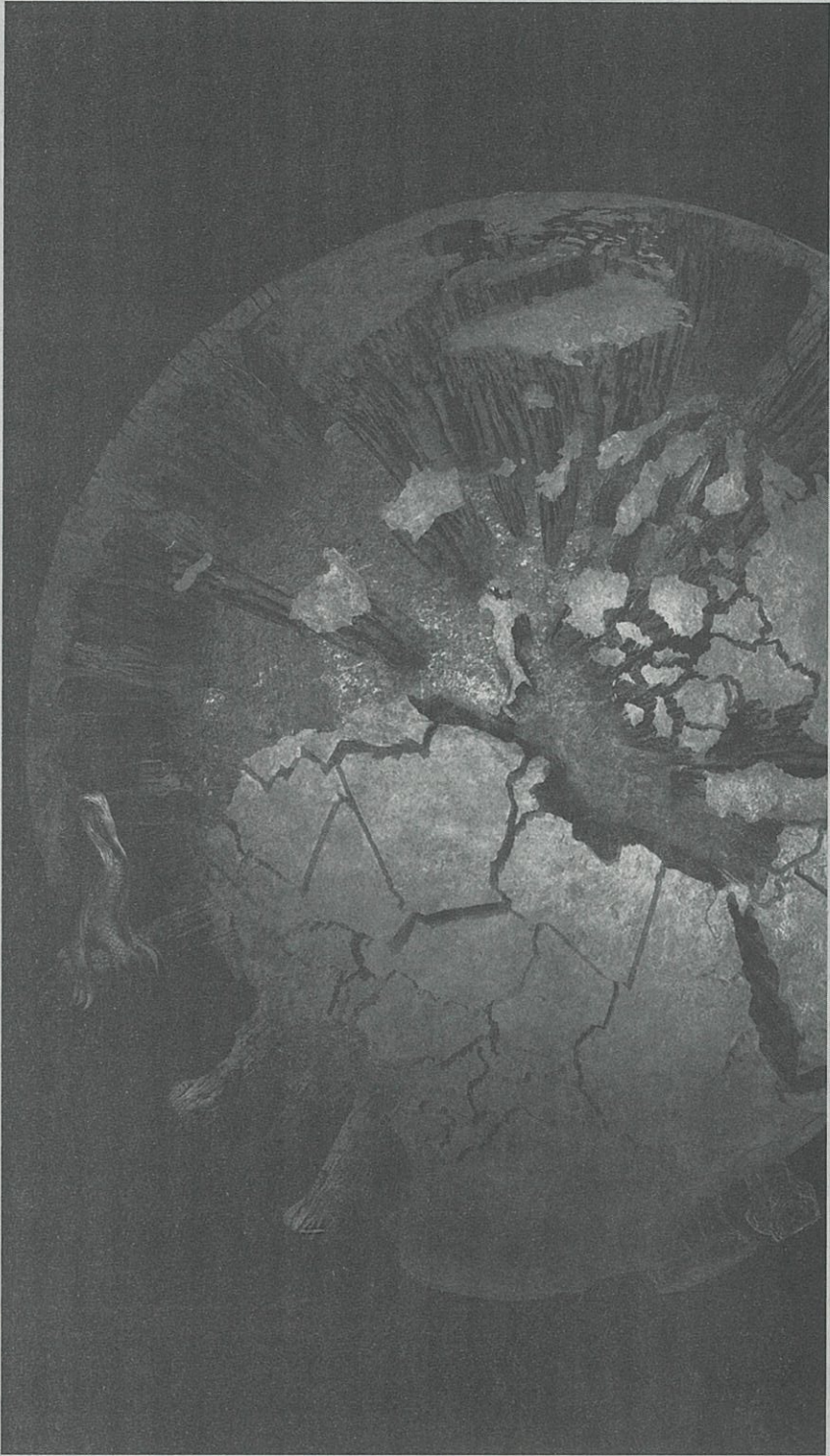
これをやり過ぎると人々の暮らしや経済に深刻な悪影響が出る。マイルドな社会距離戦略で集団免疫を目指す場合、前者より社会的負担は小さくなるが、獲得前に多数の死者が出る恐れがある。医療者がイベントの中止や自宅待機を国民に求めるのはエビデンスに基づいた「正しい」判断だ。しかし、このまま自粛が続けば経済が悪化して人が死ぬと経済学者が指摘するのも同様に「正しい」判断なのである。異なる「正しさ」が衝突する場合、そのバランスを取って決断できるのは「政治」以外にはない。メルケル独首相⑥や、ジョンソン英首相⑦のテレビ演説が国境を越えて話題になるのは数十万人の命を左右する正解のない重大な問題の決断と責任を彼らが真正面から引き受けているからに他ならない。政治思想家の将基面貴曰は「パンデミックに対抗できているのは（グローバル企業などではなく）国家だけだ」という点が決定的に重要」と指摘した⑧が、コロナ禍はグローバル化や人の国際移動が避けられない現代における国民国家の新たな役割を考えさせるきっかけになりうるのではない。欧州ではすでにそのような議論が始まっているそうだ。

社会距離戦略と経済のジレンマは、真鍋厚が新たな問題の温床になっていると指摘する「安心と自由のジレンマ」に読み替えることができる⑨。この構図で考えれば、新型コロナウイルスの患者の感染を調べるPCR検査を巡る議論も見えやすくなる。現在は専門外来に限定されている同検査だが、これを一般内科開業医まで拡大した場合、院内感染のリスクを増やし、現場に大きな負担がかかる。だが、検査を絞り過ぎると感染の疑いがある患者にも十分な検査が行き届かず、みすみ感染拡大を放置することになりかねない。日々刻々と変化する状況下でこのジレンマに「正解」を出すのは容易ではない。考えてみれば医療現場で日常的に行われているトリアージ（治療優先順位の選別）は、現場のジレンマを「見える化」したようなものだ。

「感染」

CG・小阪淳

現代社会をイメージした作品を毎月掲載します。



感染症と文明の研究で知られる山本太郎は、感染症は撲滅よりも「共生」「共存」を目指す方が望ましい」と語る一方で「医師としての私は、目の前の患者の命を救うことが最優先」とも言う⑩。医療はそもそも安心と自由の間でジレンマを抱えているが、感染症はその性質上、医療現場のジレンマが何倍にもなって社会に持ち込まれたようなものだ。残念なこと、多くの人は巨大なジレンマに長期間さらされることに耐えられない。安心と自由の間で振り子のように気持ち揺らぐと、やがて心に余裕がなくなり、そうなる「ウイルス」ではなく「人に」立ち立つようになる⑪。複雑化、自己責任化が進む社会でジレンマを抱えず生きられる人間などいない。新型コロナウイルスを巡ってネット上で苛烈な言葉の応酬が止まらない背景には、そのような心理があるのだろう。平野啓一郎は「文学は何の役に立つのか？」という問いに対して「今の世の中で正気を保つため」と答えている⑫。文学には読んでいる時の他者への共感と、読後に読者同士がより自由に、より寛大に共感し合う効果があるというのがその理由だ。他者への共感とは、すなわち立場の違いを超えてジレンマを乗り越える力だ。ジレンマと真摯に向き合っているように見える日本政治の真価が問われるのは、まさにこれからである。

- ①L. Brilliant「ラリー・プリアントが挑むパンデミック阻止」(TED Talk、2006年2月)
- ②同、S・レヴィ「新型コロナウイルスとの戦いの行方は？」(WIRED、3月25日)
- ③西浦博「西浦・北大教授『助けてほしい』解禁ムードを危惧」(YAHOO!ニュース〈m3.comから転載〉、3月24日)
- ④岩田健太郎、石坂友貴「非科学的なコロナ対策が危ない」(東洋経済オンライン、3月12日)
- ⑤H. Stevens「コロナウイルスなどのアウトブレイクは、なぜ急速に拡大し、どのように『曲線を平らにする』ことができるのか」(The Washington Post、3月17日)
- ⑥A・メルケル「コロナウイルス対策についてのメルケル独首相の演説全文」(Mikakoドイツ語サービス、3月19日)
- ⑦B・ジョンソン「『家から出ないでください』ジョンソン英首相」(BBC NEWS JAPAN、3月24日)
- ⑧将基面貴已ツイッター(3月24日)
- ⑨真鍋厚「『不謹慎』と他人を叩く人たちが映す深刻な問題」(東洋経済オンライン、3月19日)
- ⑩山本太郎「感染症と社会 目指すべきは『共存』」(朝日新聞3月11日付朝刊)
- ⑪平野啓一郎「文学は何の役に立つのか？」(中央公論4月号)

(ネット論者のUR) Lは省略しました

「論壇時評」は毎月の最終木曜日に掲載します。「あすを語る」は論壇委員6人が交代で書きます。朝日新聞デジタルでは、小阪淳さんのCGがカラーで鑑賞できます。